

平成 2 1 年度病虫害発生予報第 2 号

平成 2 1 年 4 月 2 4 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	-	平年並
		ばか苗病	-	やや少ない
		イネミズゾウムシ	平坦地：平年並 中間～山間地：やや遅い	やや少ない
果 樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	やや多い
		赤星病	平年並	平年並
		クワコナカイガラムシ	平年並～やや早い	平年並
	カキ	カメムシ類	やや早い	平年並
		灰色かび病	やや早い	やや多い
ブドウ	灰色かび病	やや早い	平年並	
	べと病	やや早い	平年並	
野 菜	ネギ	べと病	やや早い	やや多い
		さび病	平年並	平年並
		衦 ^{ハモ} ガ ^リ ハ ^エ 、衦 ^ア ザ ^ミ マ	平年並	平年並
	スイカ	菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	平年並
	ス ^イ カ、ズ ^ク 、カ ^ボ	アブラムシ類	やや早い	平年並
スイカ、メロン	ハダニ類	平年並	平年並	

[参考]

気象予報（抜粋）

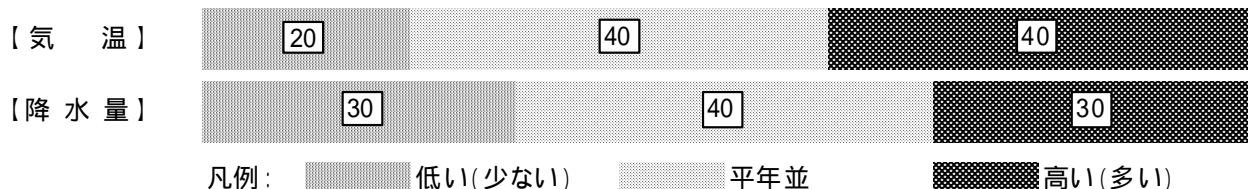
1 か月予報（4月18日～5月17日：4月17日、広島地方气象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

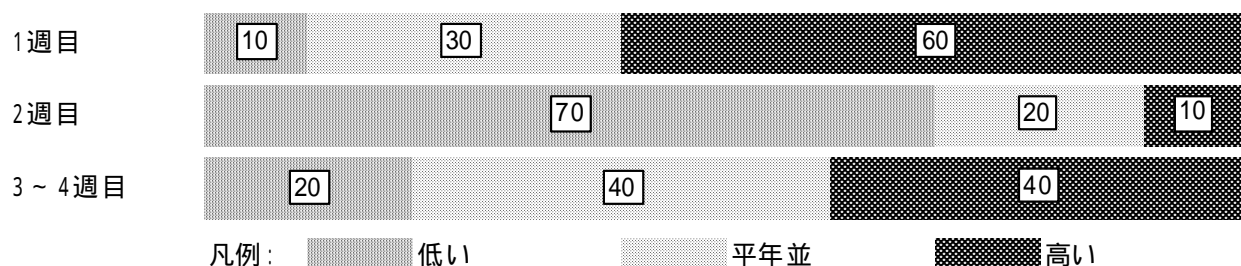
天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は、平年並または高い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は高い確率60%、2週目は低い確率70%、3～4週目は平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は困難であるため、予防防除を徹底する。

イ 育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ リゾプス属菌による苗立枯病が発生した場合には、発病部分の回復は見込めないが、緑化期(但し、は種14日後まで)までであれば、直ちにダコニール1000の500～1,000倍液などをかん注することにより、蔓延を防止できる。

エ ムレ苗が発生した場合には、タチガレース液剤の500～1,000倍液又はタチガレン液剤の500～1,000倍液を、箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

2 ばか苗病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

昨年の本病の発生はやや少なかったため、本年用種子の保菌率はやや低いものと思われる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 温湯消毒では、浸漬時間、温度などを厳守する。消毒後の種子を保管する場合には、種子を十分に乾燥させ、清潔な冷暗所に保管する。浸種を行う場合には、必ず水道水を使用し、適宜、水の交換を行う。

イ 薬剤による種子消毒(浸漬処理)にあたっては、以下のことに十分注意して行う。浸漬処理時の薬液量の不足、あるいは低温時の処理で効果が低下するので、十分な薬液量を確保し、液温は10以上を確保する。消毒後の浸種は停滞水中で行い、水温が高い場合など酸素不足になる恐れがあるときは静かに換

水する。

ウ ばか苗病、苗腐敗症（もみ枯細菌病菌）、苗立枯細菌病及びイネシンガレセンチュウは、防除薬剤の混用による種子浸漬処理で同時防除が可能であるが、薬剤ごとに希釈濃度が異なるので注意する。

エ 育苗期間中に本病による徒長苗がみられる場合には、直ちに抜取り、本田に移植しない。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平坦地：平年並、中間～山間地：やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 4月21日現在、予察灯（鳥取市橋本）への飛来は確認されていない。

イ 4月21日現在、平坦地における本種の飛翔に必要な有効温量の積算値は平年に比べてやや多いが、向こう1か月の気象予報によると、4月下旬～5月上旬の気温は低いと予想されており、発生時期は平年並になるものと見込まれる。

ウ 中間～山間地における本種の飛翔に必要な有効温量の積算値は平年並であるが、向こう1か月の気象予報によると、4月下旬～5月上旬の気温は低いと予想されており、発生時期はやや遅くなるものと見込まれる。

エ 前年の第1世代成虫の予察灯への誘殺数は平年に比べて少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守り、1箱ずつ丁寧に薬剤を施用する。特に1箱当たりの施用量が不足すると、著しく防除効果が低下するので注意する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における4月中旬の胞子飛散数は、平年を下回った。

イ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、全般的に平年に比べて低いですが、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 小袋掛け終了までの薬剤散布の間隔は5～7日程度とし、特に小袋掛け直前の防除を徹底する。

イ 薬剤はベルコートフロアブル1,500倍液、ユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液又は有機銅フロアブル（キノンドーフロアブル又はドキリン

フロアブル) 1, 000倍とポリオキシソール水和剤 1, 500倍の混用液などを使用する。

ウ スピードスプレーにより防除を実施する地域では、往復走行又は縦横走行による散布を行い、散布むらがないように注意する。

エ 雌しべ感染を防ぐため、摘果するときには必ず雌しべを取り除く。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における4月中旬の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年をやや上回ったが、病落葉からの子のう胞子の飛散数は平年を下回った。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象条件から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる果そう基部の病斑を早めに切り取る。

イ 薬剤は、落花期にE B I水和剤(スコア顆粒水和剤又はマネージ水和剤) 4, 000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル) 500倍又はチウラムフロアブル(トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル) 500倍の混用液、摘果期にベルコートフロアブル 1, 500倍液、ユニックス顆粒水和剤 47の2, 000倍液などを散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月16日時点でビヤクシン上の冬孢子堆の成熟度は100%であり、小生子の形成開始時期はほぼ平年並であった。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、落花期にE B I水和剤(スコア顆粒水和剤又はマネージ水和剤) 4, 000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル) 500倍又はチウラムフロアブル(トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル) 500倍の混用液などを散布する。

イ 例年発病の多い園又は初期病斑が多く認められた園では、5月上~中旬にE B I水和剤を追加散布する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並~やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月21日現在、越冬卵のふ化(平年: 4月30日)は認められていない。

イ 前年度、本害虫による果実被害は平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、越冬卵のふ化最盛期は平年並～やや早い5月第1半旬頃（平年：5月5日）と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年被害が多かった園では、必ず2回の防除を行う。特に、越冬世代は、第1世代及び第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。

イ 多発園では、1回目の防除はふ化最盛期と予想される5月第1半旬、2回目はふ化終期と予想される5月第2～3半旬を目安に行う。少発園では、5月第2半旬に1回防除を行う。

ウ 薬剤はスプラサイド水和剤1,500倍液又はアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月上旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、春季におけるナシ園への成虫の飛来時期は、平年に比べてやや早い4月中旬～5月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 特に山間地、民家近くのナシ園で、例年発生が認められる園では、幼果期の防除が必要である。

イ 摘果期～小袋掛け期の幼果を加害するので、この時期に果樹園への飛来が認められた場合、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを散布する。

[カキ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬に風害を受けた園では、今後、本病の発生が多くなることが予想される。

イ これまでの気象経過からカキの生育が早まっており、本病の発生もやや早まることが予想される。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、天候不順が続くと、本病が発生しやすい。

また、強風などによって若葉が傷ついた場合に突発的に発生しやすい。

イ 西条、伊豆などの品種では、本病の発生が多い傾向にある。

ウ 防除薬剤は、ゲッター水和剤1,500倍液又はオンリーワンフロアブル2,000倍液などを散布する。

[ブドウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ これまでの気象経過からブドウの生育が早まっており、本病の発生もやや早まることが予想される。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 病原菌は低温、多湿条件を好むため、開花期が天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 開花前～落花後にパスワード顆粒水和剤1,500倍液、スイッチ顆粒水和剤3,000倍、ゲッター水和剤1,500倍液、ポリベリン水和剤1,000倍液、ロブラール水和剤1,500倍液及びロブラールくん煙剤100g/くん煙室容積300～400m³(高さ2m、床面積150～200m²)のいずれかを使用する。

ウ デラウェアでは、ジベレリン処理前5日間と処理後3日間は薬剤散布できないので注意する。

エ 施設栽培では多湿条件が続くと発病が多くなるので、早朝の換気を行って施設内の湿度を下げる。

2 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月中旬現在、本病の発生はほとんど認められていない。

イ これまでの気象経過からブドウの生育が早まっており、本病の発生もやや早まることが予想される。

ウ 向こう1か月の気象条件から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花期以降、天候不順になると、本病が発生しやすい。

イ 薬剤は、展葉6～7枚にアリエッティC水和剤800倍液、落花後(小豆大)にアミスター10フロアブル1,000倍液又はストロビードライフフロアブル2,000倍液を使用する。

ウ 発病果、病葉は見つけ次第、取り除いておく。

野 菜

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生時期はやや早く、発生量はやや多い。

イ 本病は、低温の15位で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後の蔓延は早いので初期防除に努める。

イ 薬剤はアリエッティ水和剤800倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液などを予防散布する。発病を認めたら、直ちにリドミルMZ水和剤1,000倍液を散布する。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、春ネギでは本病の発生時期及び発生量はほぼ平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、夏ネギ、秋冬ネギにおいても発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除は、孢子飛散がはじまる4月下旬頃からオンリーワンフロアブル1,000倍液、バイレトン乳剤1,000~2,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。

イ すでに発病がみられている場合は、バイレトン乳剤又はラリー乳剤にカリグリーン水溶剤の800倍液を混用散布する。

ウ なお、べと病の発生もみられる場合は、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

3 ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、ネギハモグリバエは発生がほとんど見られていない。ネギアザミウマは発生のみられるほ場が散見されるが、発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、両種とも発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 苗の定植時には、オンコル粒剤5の3～6kg/10a、ジノテフラン粒剤(アルバリン又はスタークル)6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の6～9kg/10aの作条混和などの処理をする。また、ジノテフラン顆粒水溶剤(アルバリン又はスタークル)50倍液の育苗トレイ灌注なども効果的である。
- イ 本ぼ生育中のネギに対しては、オンコルマイクロカプセル1,000～2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は見られていない。
- イ 本病は、やや低温の15～20位で多湿条件が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花弁は早く摘み取って除去する。
- イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、ジマンレックス水和剤600倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、カンタスドライフロアブル1,000～1,500倍液などを散布する。
- ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m²、ロブラールくん煙剤100g/300～400m²などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 4月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は見られていない。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。
- イ 本病は株元を中心に発病が始まるので、株元にも薬液が十分かかるように散布を行う。薬剤は、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、ジマンレックス水和剤400～600倍液、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700～1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン、タバコ]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	やや早い
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における黄色水盤への有翅アブラムシ類の初飛来は平年よりやや早い4月9日であったが、その後の誘殺数は平年並である。
- イ 現地ハウス栽培スイカにおけるアブラムシ類の発生は確認されていない。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。
- イ 初発生に注意し、初期防除を徹底する。
- ウ スイカのハウス栽培では、交配前にはチェス水和剤3,000倍液などのミツバチへの影響のない薬剤を散布する。
- エ スイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス水和剤3,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤2,000～4,000倍液などを散布する。
- オ メロンでは、チェス水和剤2,000～3,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤3,000倍液などを散布する。
- カ タバコ黄斑えそ病の防除対策として、タバコとジャガイモで同時期にアブラムシ類の防除を行う。薬剤は、タバコではベストガード水溶剤2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを使用する。ジャガイモではベストガード水溶剤1,000～2,000倍液、アドマイヤー水和剤1,000～3,000倍液などを使用する。

[スイカ、メロン]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 3月下旬から4月上旬にかけての気温は平年よりやや低く推移したものの、その後は平年よりやや高い日が続いたため、ハダニ類の畦畔部からの移動時期は平年並になると予想される。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア スイカでは、畦畔雑草に対して、4月下旬までにハダニ類に対して効果のあるハービー液剤などの除草剤を散布する。
- イ ハウスなどですでに発生がみられる場合、スイカ、メロンともにニッソランV乳剤1,000倍液、パロックフロアブル2,000倍液などを散布する。多発した場合はコロマイト乳剤1,000倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液などを散布する。
- ウ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤（ミツバチへの影響7日）の使用は避ける。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、5月7日(木)の予定です。